

学芸員エッセイ

## 潤一郎あれこれ

館所蔵「春琴抄」初版本～松子とお琴～

お琴は、大阪の老舗薬種問屋の娘。盲目で気高く美しく、三味線の名手であった。そんなお琴にひたすらかしづき仕える奉公人の佐助・・・。谷崎潤一郎の「春琴抄」のヒロインお琴のイメージに大きなインスピレーションをあたえた女性のひとりだったといわれるのが、谷崎三度目の、そして最後の妻となる根津松子である。

松子は、船場の大商家に嫁いでいた女主人「御寮人」であった。谷崎とは昭和に入った頃に知り合い、家族ぐるみのつき合いがあったが、やがて谷崎との関係が深まっていく。

ちょうど作品が執筆されていた頃、谷崎は、下僕として女主人にかしづくというお琴と佐助を地でいく関係を松子との間に仮構し、実践したともいわれる。松子宛の手紙の宛名は「御寮人様」で、差出には、みずからを従順な召使いになぞらえて「順市」と自署した。現実の中に虚構をつくり出し、さらにそれを投影させるかのようにフィクションとしての作品を創造する。谷崎独特の執筆手法によって、この傑作は生み出された。それは、文豪の意図を敏感に受け止めることできた、最良のパートナー松子の存在があつてこそものだったともいえるだろう。

そんな虚構の遊びの相手はしかし、居心地悪く辛いものでもあったと、松子は後に述懐している。

書物として形にするまでが自分の作品であるというのがモットーの谷崎は、自作の装丁にも趣向を凝らした。なかでも「春琴抄」の初版本は、漆塗りで仕上げられた美しく贅沢なもの。とりわけ試作品であった赤漆本は希少である。金色の題字はもちろん松子によるもの。美麗を極めたこの本は、昭和8(1933)年12月に刊行。翌昭和9年3月、松子と谷崎とは芦屋で同棲をはじめる。二人の恋の遊戯が昇華した逸品である。

根津松子（「春琴抄」刊行間もない  
昭和9年頃の一枚）

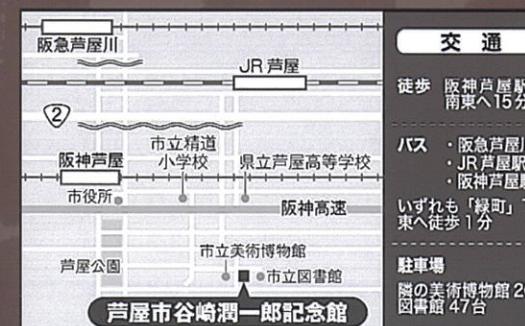
谷崎記念館だより 2021

2022年3月9日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP : <https://www.tanizakikan.com/>

芦屋市制施行80周年記念

芦屋市谷崎潤一郎記念館

vol. 3 2021

## 谷崎記念館だより

第35回 残月祭

## 楳野道流 講演会

谷崎の暮らし、  
わたしたちの暮らし

あしの みちる  
楳野道流氏

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う「残月祭」。前年度はコロナ禍のため、やむなく中止となつたが、今年度は感染対策を万全に施した上で、7月24日に芦屋ルナホールにて開催、100名の観衆が集つた。

今回は、「最後の晩ごはん」シリーズや「男ふたりで12ヶ月ごはん」など、芦屋を舞台にした作品を手がける作家・楳野道流氏に、作品やエッセイに描かれた谷崎の暮らしをテーマにご講演頂いた。光と闇が織り成す伝統的な日本の美を論じた「陰翳礼讃」を中心に、「廁のいろいろ」「幼少時代」などのエッセイに記された、自然を生かした廁の雅趣や、眞の闇が持つ力についてお話しされた。

さらに、戦時下において、創作活動から生活に至るまで大きな制約を受ける中、たゆまず「細雪」の創作を続け、毎日の食事にも楽しみを見出した谷崎の暮らしぶりをヒントに、規制の多いコロナ禍の今こそ、無駄を省いた心豊かな暮らしを楽しむチャンスと捉える必要性を話された。小説家であり医師でもある楳野氏の、鋭い視点と穏やかな話しぶりに、会場の来場者も熱心に耳を傾けた。

谷崎の旧居 岡本「梅ノ谷の家」一階の扉  
中国風の卍模様が施され、上部はスライド式の通気窓になっている。  
(記念館展示品)